

国大協
TOPICS

令和6年能登半島地震に関する対応



国立大学協会ホームページ (<https://www.janu.jp/>)

令和6年能登半島地震により被災された皆様、関係者の方々に、心よりお見舞い申し上げますとともに、被災地の1日も早い復旧をお祈り申し上げます。

国立大学では、新潟大学、長岡技術科学大学、上越教育大学、富山大学、金沢大学、北陸先端科学技術大学院大学、福井大学が被災しました。詳細については、国立大学協会ホームページに被災大学等の対応内容をまとめた特設ページを開設しておりますのでご覧ください。

地震で被災した学生、教職員及び関係者のため、また教育、研究及びその他の大学における活動を継続するため、皆様からのご支援・ご協力をお願いします。

上記の内容については
国大協ホームページ
(<https://www.janu.jp/>) から
ご覧いただけます。



国立大学

魅力あふれる大学キャンパスとは

LEADER'S MESSAGE 東京藝術大学長 日比野 克彦

OPINION

建築家

妹島 和世



国立大学協会
The Japan Association of National Universities
<https://www.janu.jp/>

国立大学 vol.71 March 2024

編集・発行 / 一般社団法人 国立大学協会 〒101-0003 東京都千代田区一ツ橋 2-1-2 TEL : 03-4212-3505

国立大学協会
The Japan Association of National Universities

【特集】
魅力あふれる
大学キャンパスとは

LEADER'S MESSAGE

東京藝術大学長
日比野 克彦 02

大学キャンパスを豊かで魅力的にするには

OPINION

建築家
妹島 和世 06

出会いが学びを、
社会との接点が創造性を生む
魅力的な「空間」としてのキャンパスを目指して

Challenge!国立大学

01 北海道大学 10

イノベーション・コモンズを目指した札幌・
北キャンパス屋外パブリックスペースの整備

02 東北大学 10

大学施設のNearly ZEB長寿命化改修による再生整備

03 東京大学 11

産学協創拠点、地域連携拠点の機能を併せ持つ
新時代の国際宿舎

04 名古屋工業大学 11

アートフルキャンパス
一心の豊かさ、創造性を育む工学とアートによる共創

05 滋賀大学 12

ダイバーシティ教育の推進と
障害児者のための音楽教育支援センター「おとさぼ」の創設

06 京都大学 12

国立大学が創る新たな学童保育所モデル
『京都大学キッズコミュニティ (KuSuKu)』

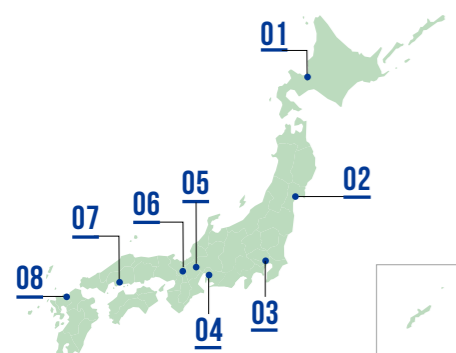
07 広島大学 13

世界・地域・大学から人が集い、
交流する、ワクワクする「場」を創り出す

08 九州大学 13

歴史や自然などの豊かな環境と共生し、
未来社会を切り拓く実証実験キャンパス

『魅力あふれる大学キャンパス』14



特集に寄せて

光あふれる
大学キャンパスを求めて

大学キャンパスでは、質の高い研究・教育によって、国内外から広く優秀な人材を惹きつけ、グローバルに活躍し、社会をリードしていくことのできる人材を育成していくことが求められています。そのために、それぞれの大学では固有の教育理念・伝統を大切にしつつ、グローバルな視点に立ち、学術分野の発展とともに競争力のあるキャンパスを形成することが目指されています。

本特集には、社会課題への対応、たとえば地球環境に配慮したサステナブルキャンパス、キャンパス内の学童保育、子育て支援などのダイバーシティへの対応・地域との連携や貢献、他にも産学共創拠点、歴史や伝統の継承など魅力的な工夫が多数紹介されています。

一方、魅力的なキャンパスの実現には、中長期的なキャンパス整備ビジョンとともに施設整備のための資金も必要とされます。国からの施設整備費補助金などの財政支援が限られる中、ここには、世界に誇りうるキャンパスを獲得するための産業界、同窓会や地域自治体からの支援等が引き出せるような取組も含まれています。

国立大学には、これからも優れた研究や教育を行い、多くの留学生を含む学生や研究者にここで学びたい、研究をしたいと思われるような魅力あるキャンパス空間を追求し、学術研究や人材の育成などを通じて、未来を拓き、社会をリードしていく役割が期待されています。



お茶の水女子大学長 佐々木 泰子

【特集】魅力あふれる大学キャンパスとは
LEADER'S MESSAGE

大学キャンパスを
豊かで魅力的にするには

キャンパスは大学の活動を支える基盤となるものです。

物質的にはキャンパスとは敷地や建物を指しますが、キャンパスという言葉にはそれ以上の意味も込められています。アーティストとして長年、現代社会と対峙してきた東京藝術大学の日比野克彦学長にキャンパスについてお話を伺いました。



東京藝術大学長

日比野 克彦

キャンパスの主役は人

キャンパスは学生が学ぶ勉学の場でもあり、研究者が専門分野の研究を進める研究の場でもあります。それと同時に、たくさんの人たちが集まり、生活する場でもあります。特に、自身の未来を見つめ好奇心あふれる若者にとって、人との出会いはとても大切です。人は一人では自分らしさは確立できません。私も、学生時代に先輩や同級生たちと交流することで、自分についてよく知ることができました。人は人と出会うことで初めて自分らしさが見えてくるのです。建物があるところに人が集まるというより、人が集まる場所がキャンパスであるという感覚があります。

東京藝術大学は上野、北千住、取手、横浜の4か所にキャンパスがありますが、上野キャンパスは上野公園の一角にあり、学生たちは博物館、動物園、美術館などのある文化ゾーンの中の雰囲気を感じながら生活します。キャンパスの敷地だけでなく、そのような周辺の環境もキャンパスの一部と言えます。

— キャンパスの中で建物はどのような役割を果たすのでしょうか。

人と話をするのでも、屋外で立って話すと、部屋の中でイスに座って話すのでは、体のリラックスの度合いなども変わります。アー

ティストにとってキャンパスは自分の表現を追求するためのアトリエでもあり、建物や風景も含めて居心地のいい空間はとても大切です。音楽で言うと、防音の練習室で聞く音とホールで聞く音は全く異なるため、空間や場所が持つ場の力、人々の共有する時空間という空間への意識はより直接的であり、その感覚は強いと思います。

しかし、いい建物をつくれれば、いい作品ができるわけではありません。科学分野では、専門的な機具やスーパーコンピュータなど、新しい発見をするために巨大な装置や施設が必要になるところがあります。しかし、芸術の場合は、自分の中に無限の空間があります。建物やキャンパスは、その無限の空間を引っ張り出し、表現に繋がるきっかけや、人との交流の場となるものなのです。主役はあくまでも人間です。

一方で、東京藝術大学でも、新しい建物をつくってはいます。たとえば、2022年12月には上野キャンパスに国際交流棟が完成しました。

国際交流棟には、学生生協、食堂、多目的フリースペースなどがあり、人が集まる空間を集約し、学生らが交流できる場があります。さらに、この国際交流棟の建物の外壁の表面にはたくさんのパブリックアートを施しました。

パブリックアートは、道路、公園、商業施設など、公共空間に設置されることが多いので、安全性や耐久性の条件が厳しく、素材や取り付け方などがかなり制限されます。しかし、国際交流棟は公共空間といっても大学内にあるので、これまであまり使われていなかった素材を実験的に使用するなど、既存概念に囚われずにチャレンジしていく場にしています。実際、国際交流棟のパブリックアートでは、和紙を使用した作品がつくられています。石やブロンズといった経年劣化しにくい素材を使用することが一般的ですが、それではどこか同じようなものが出来上がってしまいます。こ

のパブリックアートは、5つの研究室が作品をつくって展示しているのですが、「世の中にないものをつくる」という目的が一致していたこともあり、実際に同一の壁面に展示してみるとその互いの異なる素材が相互作用を起こし、東京藝術大学を象徴する個性がぶつかり合った空間にふさわしい風景になっていると思います。このような建物がシンボリックにあることでキャンパス内の空気が変わりますね。

創造空間としてのキャンパス

— 学問の分野によってキャンパスに違いが出るのでしょうか。

やはりキャンパスにはそれぞれの分野の特徴が出ると思います。先ほども触れましたが、東京藝術大学の場合、美術学部のカンパスは作家たちのアトリエという要素があります。キャンパスを歩くと、作品に使用する大きな石がごろごろし、石を叩く音が響くこともあります。また、金属を扱う学科では金属を溶かして鋳型に流し込む鋳金など、都会のど真ん中で何百年も続く伝統的な作業をする人もいます。そうかと思うと、絵画・彫刻の分野では博物館や寺社仏閣から依頼された修復作業を、息を殺しながらやっていたりします。音楽学部では、クラシック、邦楽などの様々な楽器のレッスンやオペラ、声楽、能、狂言などの舞台の練習などをやっています。キャンパスは稽古場であり、発表の場となっています。

また、東京藝術大学が他の大学と異なるのは学生と教員の関係です。科学は知識を縦に蓄積していく側面がありますが、美術は必ずしもそうではなく、先人の知識は横に並んでいます。そのため、キャンパスにも60代の教員も10代の学生も1アーティストであるという独特の感覚があります。

このように、キャンパスは、表現者たちのたくさんのエネルギー



が渦巻いている空間になっています。建物や部屋の中に入ると、その分野の独特の雰囲気があると思います。

学生にとってのキャンパスとは

学生が授業に真面目に取り組んでいる姿はとても素晴らしいことですが、学生時代には授業以外にも分野の違う人たちとたくさん出会ってほしいという願いもあります。私が学生のときは部活動に力を入れていて、そこでの出会いもたくさんありました。しかし、今はコロナ禍の影響もあり、サークルや部活動などができずにキャンパスライフの伝統が継承されなかつたり廃部になったりする部活動もあります。

そうすると、勉強以外の学生生活の余白という「のりしろ」のような部分がものすごく減ってしまいます。サークルや部活動を以前のように復活させるにはもう少し時間がかかります。以前のようなキャンパスライフを復活させるのがいいのか、それとも今の時代に合わせた新しいキャンパスライフを構築するのがいいのかは課題ですが、そこを開発していくのが魅力ある豊かなキャンパスライフを取り戻すポイントになってくると思います。学生たちには、なるべく多くの人たちと出会う場に積極的に飛び込んでほしいです。大学キャンパスはそのような出会いの場を提供する場所であり続けます。

地域のコミュニティの核としてのキャンパス

大学の後にも教育は続きます。生涯教育という言葉もありますが、大学教育は、小学校、中学校、高校での教育が前提にあります。大学教育に期待されているのは専門性を高めるものや研究者になるための教育だと思いますが、その前段階となる小中高ともっと連携した教育が大切かなと感じています。

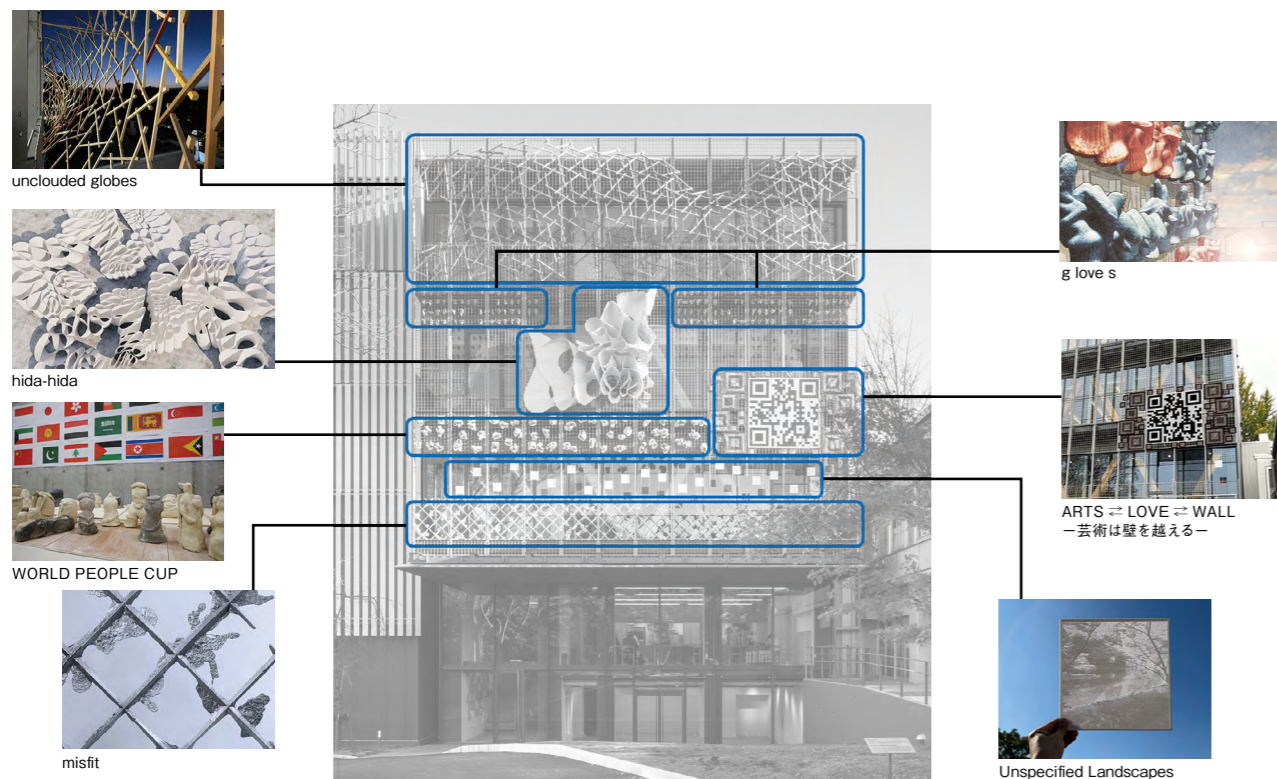
地域には継承されてきた祭りや行事があり、小学校や中学校にも地域の人たちが出入りできるような環境がありましたが、事件や事故が過去に発生したことで、学校の管理責任が問われるようになり、最近は学校と地域に溝ができてしまいました。今の子どもたちは、特に地域の人たちとの交流が極端に減っているのではないかと思います。昔は何をせよとも自然に培われてきたものも、現代社会では意識的に教えていかないと身につかない状況になっています。義務教育、高等教育、社会に出た後のリスクリングなどを個々に考えるのではなく、生涯教育の広い視点の中で有機的に繋がるように捉え、考えていくことが必要でしょう。

そのような事業をする際、大学のキャンパスが地域の拠点として機能できるのではないかと考えています。大学の一番いいところは、長期間にわたる事業に継続的に取り組める点です。企業は利益を出すことを目的にしているのでも、せっかく始めた事業も、業績が悪化すると継続できなくなるリスクがあります。それに対して大学は、社会的に意義のあることを長期間継続することができます。大学の役割の一つは、学生や卒業生が集うコミュニティを地域に提供することだと思います。地域の人たちと協力を体制をつくるのであれば、大学のキャンパスに魅力が出てくると思います。

今日本で地域格差が解消されないのは、地域の魅力を発信する核がなく、その役割をベンチャー企業など経済が担っていることも要因の一つです。継続性のある大学こそが地方ならではの魅力をつくっていかなければならないと思います。

ここで一つ気をつけたいといけないうのは、それぞれの土地には必ず歴史があるということです。その土地の歴史を理解しないまま、キャンパスの目指す姿を決めてしまうと、結局、場所はどこでもいいことになってしまいます。

その土地の歴史的な価値、地形、風土、文化などを取り入れ、研究を深めていかないと、そのキャンパスにいる意味がないと思



東京藝術大学国際交流棟 (https://www.geidai.ac.jp/wp-content/uploads/2022/12/20221215_leaf.pdf) (提供：東京藝術大学)

OPINION

出会いが学びを、 社会との接点が創造性を生む 魅力的な「空間」としてのキャンパスを目指して

魅力あふれる大学キャンパスとはどのようなものなのか？

国内外で数々のキャンパス内の建物の設計を手掛けてきた妹島和世氏が注目するのは、

教育、研究といった「機能」の間にある「空間」の力だ。

妹島氏が建築を通じてキャンパスを設計するにあたり考えてきたこと、こらしてきた工夫を語っていただく中から、

大学の持つべき機能、担うべき役割を踏まえた真に魅力的なキャンパスとは何かを探る。



建築家

妹島 和世

キャンパスで生まれる出会いと交流が 新しいものを生み出す力となる

妹島氏が初めて手掛けた大学関係の建築は2009年に完成したスイス連邦工科大学ローザンヌ校（以下、EPFL）内にあるROLEXラーニングセンター。図書館、レクチャーホール、食堂等が入っている。

「コンペから始まったプロジェクトですが、大学の設計は是非やってみたい仕事の一つでした。大学キャンパスは、文化的施設であると同時に生活、日常が混じり合っていて、そこは様々なこと

が起こる場であり、それがとても面白いと感じたからです」

さらに、ROLEXラーニングセンターのプロジェクトに興味を惹かれた理由には、大学側から提示された「新しい教育の場とは何かを考え、提案してほしい」というテーマもあった。このとき妹島氏が考えたのが、大学は「出会う場」であってほしいということだ。

「大学には、異なるいろいろなことを学ぶ人たちがいる。その人たちが出会って交流することで、何か新しい発見が生まれるのではないかと考えたのです。このことは、大学の『建物』を考える上でも、もう少し広くキャンパス全体について考える上でも同じだと

ます。東京藝術大学の上野キャンパスは、歴史を遡ると徳川家の菩提寺である寛永寺の敷地でした。

明治維新以前は上野公園一帯がすべて寛永寺の敷地だったのです。来年は寛永寺が創建400年を迎えるということで、東京藝術大学と寛永寺が連携し、地域活性化に繋げるプロジェクトも立ち上がっています。その一環として、寛永寺の中に東京藝術大学の先生の作品を展示したり、寛永寺幼稚園内で大学の授業を行ったりするなどの活動を計画しています。

その他にも、取手キャンパスでは、地域の人たちと連携してキャンパスの中で畑をつくり、野菜を栽培したり、ヤギを飼ったりしています。畑で収穫した作物は、学食の料理に使われ、学生たちに提供しています。このような活動を通して、都市部のキャンパスでは学べないことを学べるように工夫しています。

アーティストの力でキャンパスを元気に

—— 国立大学が今後キャンパスの魅力を発信していくためにはどのようにしたらよいでしょうか。

一つのアイデアですが、それぞれの大学にアーティストを滞在させてみてはどうでしょうか。アーティストはその場にある力を引き出し、より魅力的に見せるのが得意です。瀬戸内国際芸術祭や新潟県で実施されている大地の芸術祭など、過疎の地域にアートが入ることによって、その魅力がたくさんの人たちに知られるようになりました。また、ニューヨークのソーホーやベルリンの倉庫街なども、アーティストが住みつくことで、魅力的なエリアとなっていました。

多くの人が「つまらない」と思うものも、アーティストは独自の視点や価値観から、面白さを見つけることができます。古く、魅力がないとよく言われる建物こそ、アーティストが関わる絶好のロケーションです。

最近STEM教育（Science, Technology, Engineering, Mathematics）やSTEAM教育（Science, Technology, Engineering, Arts, Mathematics）の重要性が叫ばれていますが、「STEMからSTEAMへ」と聞いたとき、違和感を覚えました。芸術（Art）は他の分野に足りないものを補完するのではなく、芸術こそがすべての学問の基盤になっていると思うからです。一人ひとりの基盤にアートシンキングを取り入れ、全員がアーティストになることが大事ではないでしょうか。

大学のキャンパスを魅力的にするために、流行を追いかけたり、新しい建物を建てたりするという発想ではなく、その大学ならではの得意分野や特徴を形にしていくことが大切だと思います。たとえば、香川大学の瀬戸内海に面している研究センターと東京藝術大学が協同してアートとサイエンスの共創拠点にしていく計画があります。熊本大学ではキャンパス内に歴史的建造物があることを活かし、キャンパスミュージアムとしてアピールしています。どの大学にも必ずそのような魅力はあるはずですが、構成員は見慣れてしまい魅力に気づきづらいかもしれませんが、アーティストの目が外から入ることで、それぞれの大学の魅力を発信していけると思います。すべての国立大学がアーティストを招いて、それぞれの大学

の特性を活かしたアートを制作すれば、キャンパスの魅力が増すと思います。その過程で、大学の核となる可能性を探るきっかけにもなるかと思っています。

「国立大学」全体が一つのキャンパス

東京藝術大学は、2024年1月26日現在、38の機関と連携し、産学官の共創プロジェクト「共生社会をつくるアートコミュニケーション共創拠点」に取り組んでいます。このプロジェクトには岐阜大学、名古屋大学、京都大学などの国立大学も参加しています。また、香川大学、東京大学、東京医科歯科大学、東京工業大学と連携して提案したプロジェクトが「地域中核・特色ある研究大学強化促進事業（J-PEAKS）」に採択されました。同じ国立大学のグループだからこそ、様々な大学とも話がしやすく、様々なプロジェクトで協力体制をすぐにつくることができます。

国立大学は国立大学協会という組織があり、同じ傘の下で動いています。アメリカの大学のアイビー・リーグやサッカーのプレミアリーグのように、国立大学にはリーグとしての魅力があります。ここは大きなアピールポイントです。私個人としては、国立大学全体が一つの大きなキャンパスを形成していると考えの方が腑に落ちます。

国立大学の大きな役割の一つは、日本を支える人材を輩出することです。日本の人材をどのように豊かにしていこうかと考えたときに、国立大学全体が協力し合うことが必要だと思います。もちろん、それぞれの大学の専門性がありますし、いい意味での競争も大切ですが、86の国立大学が一つのチームとしてまとまることのできるのが国立大学の魅力の一つであると感じています。



日比野 克彦（ひびの かつひこ）

1958年生まれ。岐阜県出身。東京藝術大学美術学部デザイン科卒業、同大学大学院修士課程修了。大学在学中より段ボールを使った立体作品などで注目され、1982年に第3回日本グラフィック展大賞、1983年に第30回ADC賞最高賞他受賞多数。デザイン、絵画、舞台美術、映像、パブリックアートなど多岐にわたり活動し、近年は様々な地域で一般参加者とその地域の特性を活かしたアートプロジェクトやワークショップを多く行っている。1995年に東京藝術大学美術学部助教授に就任。その後、准教授、教授を経て同大学美術学部長に就任。2015年より岐阜県美術館長、2021年より熊本市現代美術館長を務める。2022年4月より現職。

思っています」

ところが、実際にEPFLのキャンパスを歩いてみると、出会いの場がすごく少ないのに気づいた。ただ広い空間があり、学生がどこにいるのかわからない。学生にヒアリングしてみると「授業と授業の間にいる場所がない」と言う。研究室に所属すれば居場所はあるが、基本的には毎日授業に来て終わったら帰るだけの日々だ。「もうちょっと『滞在』できる、気持ちのよい場所があればいいのに」。そう思ったことが、妹島氏のその後のキャンパス建築設計の原点となっている。

建物から学生があふれ、社会と接点を持つ 日本女子大学の新キャンパス

こうした思いは、妹島氏が卒業生としてランドデザインを担当した、日本女子大学「目白の森のキャンパス」にも込められている。建築計画は、日本女子大学創立120周年記念事業として2012年にスタート。当時川崎市にあった人間社会学部が目白キャンパスに移転し、創立120周年を迎える2021年4月には大学創立の地である目白に4学部15学科と大学院を統合するというプロジェクトだ。このプロジェクトで妹島氏は、ランドデザインの他、百二十年館や図書館など4つの建物を設計している。

「最大の課題はキャンパス統合でした。目白という都心の、ただでさえ建て込んだ場所が、それまで4000人だった学生が2000人増えて6000人になるという。高密度になりながら快適である空間をどうつくるかが問われていました」

そこで考えたのが、「学生がいろいろなところにあふれているキャンパス」というコンセプトだ。

「いろいろなタイプの学生の滞在できる場所、ディスカッションしていたり、ただご飯を食べながらリラックスしていたり、あるいは静かに本を読んでいたりできるといい。さらにその姿が『見える』方が高いと思いました。姿が見えることで、様々な異なる分野を勉強している人同士が出会うチャンスが増えると考えたからです」

こうした発想で新設された百二十年館は、大きな吹き抜けの中庭を備え、1階の半分以上をピロティ構造とすることで、その周りに建つ複数の既存の建物を視覚的、物理的につなぐものとなった。そのことで、堅牢な建物の中に学生が入って見えなくなってしまうのではなく、姿が見える状態が生まれている。

また、こうした構造は大学の内外を自然につなげる役割も果たしていて、妹島氏が重視するもう一つのコンセプトである「社会と接点があるキャンパス」の実現にもひと役買っている。

「大学というのは、日本のため、世界のために人を育てる場所であり、社会全体で大切にしていけるべき場所だと思うんです。一方で、社会に大切にされている分だけ、大学側にも社会に対する責任がある。だから、折に触れて開放したり、大学の中にいる先生方に市民が話を聞ける機会があるといいし、それがしやすい構造になっていると思うんです。また、そうやって社会の一部につながっていることは、学生が学びながら自分の考えを広げていく上でも大きな意義を持つはず」

大学は、大学内部で育まれたものを社会に返し、返しなが

らも学んでいく。キャンパスはそんな相乗効果を支える存在にもなれるのだ。

大学が築いてきた時間を通じた知の蓄積 キャンパスを通じてそれに接続する

日本女子大学での仕事を通じて妹島氏が感じたことのひとつが、大学が内蔵する時間が持つ価値だ。

「日本女子大学は、日本で最も古い女子大ということもあり、七十年館、八十年館というように、百二十年館以外にも『〇〇年館』という建物があります。そういう時間による知の蓄積が、大学にはあるわけですね。いわば時間とつながることができる、こうした特性は大学ならではです。たとえば商業施設であれば、廃れてなくなってしまうこともあるかもしれませんが、ですが大学であれば、ずっとつなげていく場所であり得るのではないかと思います」

「時間につながっていく」という大学の特性を活かすため、形にしてみたいプランもあるという。

「キャンパス計画の授業で学生から出たアイデアで、『大学の先生が退官されたとき、キャンパス内に小さな小屋をつくり、その先生のパピリオンにする』という案があったのですが、これは素晴らしいアイデアだと思いました。一つ一つの建物が、先生の蔵書や研究を収めた小さな図書館のようになっていて、訪問すれば先生の業績に触れることができる。学生にとっては、今自分が勉強していることが、大学のキャンパスという場所ですとつながっていることを感じることで、未来についてもイメージしやすくなる。実現してみたいなあと思います」

キャンパスは、学生がそうした価値を感じる場でもある。妹島氏がキャンパスを考えると「全体像を感じられるように」と考えるのもそのことと無縁ではないだろう。

「一人ひとりの学生にとっては、キャンパスの中で自分が主に使う場所は固定化されているかもしれませんが、全体像として、どこに何があり、どういう人が学んでいるかを感じられる方がいい。日本女子大学の場合は高密度なので『みんなの姿が見える』ことを考えましたが、広いキャンパスであれば、たとえば中央に公園があってそこから道が放射線状に伸びているなど、空間的に全体像を理解できるものなども考えられると思います」

教育、研究という機能の「空間」にこそ 生まれる新しい学びやアイデア

大学の機能という面ではどのようなことを意識しているのか、妹島氏の考えを聞いてみた。

「大学の機能には集中と広がりがあると思うんです。静かな環境で、個人で集中できることも重要ですが、大学には、そこにいる人同士でディスカッションをする、あるいはもっと外に発信をしていく機能もある。そういうことを空間的に実現できれば、今度は学生がそれらを違う形に組み直していくということも起こるのではないかと思います」

こうした「空間」という捉え方は、従来の大学キャンパスにはなかったものかもしれない。教育という機能を果たす「教室」、研究

という機能を果たす「研究室」は備えてきたが、妹島氏が指摘するのはそうしたことを超えた機能だ。「従来の教室や研究室という機能の『間』で、学んだり思いついたりすることはたくさんあるはず。私も、教育や研究といった機能についてはもちろん考え、それが快適にできるよう設計しますが、そのためにしか使えないというのではよくない。使用する人が好きなように機能を拡張できるように常に考えています」

大学を空間と捉えると、その中で「一緒に学ぶ」ことの意義も捉えやすい。

「同じ空間で学ぶことで、知らない者同士であっても、同じ大学の一員だと感じられるようになり、そのことがプライドにもなります。そのことで、自らも大学の一員として果たせることは何かを考える心が芽生えるのではないのでしょうか」

「建物を設計するときも、その形以上に空間が重要」だと妹島氏は言う。「大切なのは、『自分の場所』を感じられること。そういう意味では、天気がいい日には屋外に出て、キャンパスじゅうに点在して授業を聞いてもいい。それができれば、大教室どころかキャンパスが大講堂になるということですよ。また、自分の好きな場所を探したりつくったりしていけることも大切だ。「たとえば、図書館に大テーブルがあれば狭いカウンターもある。明るいところもあれば暗いところもある。自分の好きな図書館を組み立て直せることを目指しています」

キャンパスの機能といえば、最近では、「集える場所」としてのラーニング・コモンズに注目が集まっている。その一般的なイメージは、「従来の静かな学習空間とは異なり、ディスカッションやグループワークができるよう整備したスペース」といったところだ。

「人が集まれる」ということは、妹島氏がキャンパスを設計する上でも強く意識するポイントの一つでもある。ただそれは、「ラーニング・コモンズとはこのようなものだ」という典型的なものでもなく、とも妹島氏は捉えている。

「ラーニング・コモンズという何となく、それ用の家具を置いて専用のスペースをつくるようなイメージがありますが、そうではなく、たとえばただ通り道に庇があるというだけでもいいと思うのです。むしろ、もっといろんな場所で、いろんなことが起こればさらにいい。だから日本女子大学のプロジェクトでは、食堂の上階であったりただのテラス席であったり、様々な場所にそうしたスペースを点在させました。よく『公園のように』と言うのですが、『ここでこうして過ごさない』というのではなく、まさに公園のように人が思い思いにいられることが、『集う場』をつくることにもなるのではないのでしょうか」

思考に具体性と創造性をもたらす街の力 街を豊かなものに変えていく大学の力

既存の大学のキャンパスに対しても、「こうだったら面白い」と思うことや、新しいアイデアを聞いてみた。

「伝統ある大学には、時間をかけて生まれた素晴らしい雰囲気があります。たとえば1階にだけ、どの学科からも入ってこられるスペースをつくるか、中が丸見えのところ一つ加わると面白いかもしれませんね。その中で行っている実験などが全部見えた



「出てくる答えは違っても、キャンパスの設計には共通する考え方があり」と妹島氏。その一つが社会とのつながりだ。ボッコニー大学（イタリア・ミラノ）では室内と中庭が交互に反復しながら公園に広がる校舎、大阪芸術大学では半外部の廊下から直接教室に入れるつくりなど、それぞれの個性や立地に合わせた「つながり」を表現している。

りするような……他の場所はそれぞれ独立していても、そういう場所を一つつくることで、周りが新たに関係づけられるようになるのではないかと思います」

個人的に面白いと感じたのは、岡山大学医学部の最も古い建物だという。

「ドイツから帰っていらした教授のためのもので、当時のドイツのスタイルらしいのですが、一つの棟の中に先生の研究室があり、階段教室も実験室もあって、先生を中心にしたその先生の家みたいなあり方なんですよね。一人の先生という単位で閉じているようでもありながら、研究棟と実験棟と教室が分かれた現代のキャンパスと比べると何だか開いているようでもある(笑)。学生の人数が少ない時代だから可能だったことで、今そのまま真似るのは難しいかもしれませんが、研究や教育という機能ごとに建物を分けるのではなく、違う組み合わせを考えてみたら楽しいのではと考えるヒントになりました」

妹島氏が新たなアイデアとして提案するのは、「街なかの分室」だ。「研究室が手狭になったときなどに、街の中に分室をつくれれば、大学と行き来するだけで街の機能を自然に取り込むことができます。街の生活の中で、大学の教室で学ぶのとは違った学び方ができることは、学生にとっても大きなメリットであるはずです」

「街の力」について考えるとき、妹島氏が思い出すのはある大企業のオフィスの話だ。その企業は、地下鉄駅からそのまま上がった場所に最先端のオフィスを構え、ビル内にレストランも備えたことで社員はランチのために外出する必要もなくなった。そして同じビル内には思索のためのスペースなどクリエイティビティを刺激する工夫もこらしているという。

「でも考えてみれば、もしビル内にレストランがなければ、社員は外にランチを食べに行くわけで、そうやって街に出れば歩きながら考えごとでもでき、街から受ける刺激もあるんですよね。そういう環境が持つよさを離れたところに、本当に創造的なものがあるのだろうか?と思うのです」

大学キャンパスにまつわる傾向に目を向ければ、スペースの問題や各種の規制に縛られがちな街なかのキャンパスを売却し、広々として自由な設計が可能な郊外に移ろうとする動きもある。妹島氏は、静かな環境で研究・教育を行う意義については認めながらも、「やはり街と接点を持つ面白さは捨てられない」と説く。

「たとえば郊外の更地に広大なキャンパスをつくと、思考も抽象的になりがちだと思うんですね。学問にとっては抽象的であることも必要かもしれませんが、すべてのものから切り離されると、やはりあまり面白い場所にはならないのではないのでしょうか。私自身はやはり、大学には街とのつながりがある方がよいように思えます」

大学が街と接点を持つことは、街への貢献にもなり得る。たとえばシカゴのイリノイ工科大学は、地域の中に大学のキャンパスが広がり、そのことで地域が改良され魅力的になってきているという。

「日本なら、たとえば自治体の協力を仰ぎながら、街なかの空き家を活用することなどもできるのでは。引き取り手がなく問題になっている空き家が大学の施設として活用されるのであれば、空き家の持ち主である市民も嬉しいのではないのでしょうか」

「新しいタイプの公園」として 社会にとっても魅力的なキャンパスへ

「大学にはいろんなあり方があると思いますが、どの大学であっても、若い学生の方がそこで一定の時間を学んで過ごし、世の中に出ていくということ、そしてそこにはたくさんの先生方がいらっしゃるということを見ると、大学の持つ『財産』は素晴らしい」と語る妹島氏。特に国立大学については、「素晴らしい人材が生まれる可能性を秘めた場所であり、ぜひそうした人材に生まれ出してほしい」とエールを贈る。

同時に、国立大学のキャンパスについても、他にはない場としての価値と、それへの期待を語ってくれた。

「国立大学の広大なキャンパスは、学生だけでなく社会にとっても魅力的な、新しいタイプの公園になれると思っています。大学は、多くの人がある方向に向かって一緒に勉強したり研究したりしている場所であり、そこには、大学にしかつくれない雰囲気があります。そうした雰囲気の中で散歩したり、少し座って本を読んだり、ときには一般の人が参加できるイベントのようなものが開催されていけば楽しいですね。国立大学の構内にはよく銅像などもありますが、そういうものを見て歩き、『こういう先生がいたんだな、こういう研究があるんだな』ということを感じるのもいいもの。先ほどお話しした『退官した先生のペリオン』も、同じ意味で魅力的です。大学が生み出すものは、たとえ誰もが理解できるものではなくても、触れているだけで何となく楽しいもの。大学にしかつくれない『キャンパス』の雰囲気、それが全体的な知性の底上げになったり、大学へのリスペクトになったりもするでしょう。社会に向けて、遊ぶだけの楽しさではないそうした価値を提供できることもまた、大学のキャンパスが魅力的であるということの意味なのではないかと思います」



妹島 和世 (せじま かずよ)

1956年生まれ。茨城県出身。日本女子大学家政学部住居学科卒業後、1981年に同大学大学院家政学研究科住居学専攻修士課程修了、伊東豊雄建築設計事務所に入所。1987年に妹島和世建築設計事務所を、1995年に西沢立衛氏とともにSANAAを設立する。2010年、建築界のノーベル賞と呼ばれるプリツカー賞を受賞。2015年、政府が海外主要都市に創設する日本の対外発信拠点「ジャパン・ハウス」の有識者諮問会議メンバーに選出。2016年紫綬褒章受章。主な建築作品に、金沢21世紀美術館、ルーヴル・ランス(ランス・フランス)など。大学建築ではROLEXラーニングセンター(ローザンヌ・スイス)、ボッコロニ大学新キャンパス(ミラノ・イタリア)、日本女子大学、岡山大学、大阪芸術大学等を手掛ける。

01 北海道大学

イノベーション・コモンズを目指した札幌・北キャンパス屋外パブリックスペースの整備

先端研究を行う研究施設群における大学等の知的財産を活用した地域及び国への貢献

北海道大学の北キャンパスは、先端研究を行う研究施設群(サイエンスパーク)として、様々な分野にわたる研究施設等を集約している。併せて、本学を含め、道、市、国、道経済連合会など12機関で構成する「北大リサーチ&ビジネスパーク協議会」を立ち上げ、北キャンパスと周辺エリアで先端的な研究開発の促進や、大学等が持つ知的財産を活用した新技術・新製品の開発、ベンチャー企業・新産業・スタートアップの創出によって、道経済・産業の活性化とともに、わが国の発展に貢献していく取組を進めている。

継続的な共創を生み出す仕掛け(空間)づくり

一方で、当該施設群では最先端研究を行っているため、大半が高セキュリティの施設となっており、異分野の研究者が集まっているにもかかわらず、交流が生まれにくい状況となっている。このことから、相互の交流や議論を喚起する場や、施設利用者が過ごしたくなる場として、外部パブリックスペースを整備する。分野を超えた研究を実現す

るための空間及び継続的な共創を生み出すための空間とするため、利用者となる教職員、学生対象のワークショップを実施するなど、整備計画策定段階からユーザーを巻き込んだ整備手法を展開している。

整備を通じて期待できる成果

- 研究成果の発表や、大型機器展示等を通じた、大学シーズと企業ニーズのマッチングイベントなど、新たな研究者と企業等の繋がりを生む共創活動の実現
- 積雪寒冷地での公共空間デザインのための行動分析、自動運転除雪機等、実証実験の場としての活用及び当該取組を知った新たな企業等との連携創出の実現 等



完成イメージ図

02 東北大学

大学施設のNearly ZEB長寿命化改修による再生整備

キャンパスのカーボンニュートラルの実現に向けて

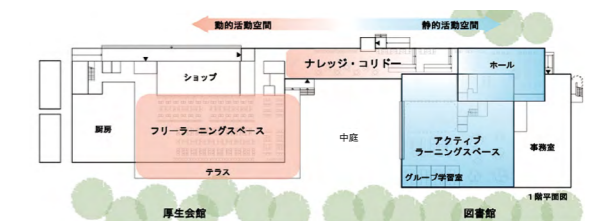
東北大学は2021年に、「2030年度のCO₂排出量を2013年度比で50%削減」及び「2040年度カーボンニュートラル」を目指す『東北大学Green Goals Initiative』を宣言し、グリーン社会の実現に貢献する人材の育成、研究開発、社会共創を進めるとともに、キャンパスのカーボンニュートラルを推進している。



外観写真(左奥:図書館、中央:ナレッジ・コリドー、右手前:厚生会館)

キャンパスライフの中心となる施設の再生整備

2023年5月31日に竣工した図書館及び厚生会館の改修工事では、仙台の気候に適した省エネ仕様を検討し、建物の高断熱化、高効率空調及びLED照明など徹底的な省エネ化を図ることで、国内でも例の少ない「改修によるNearly ZEB」※を低コストで実現した。また、ナレッジ・コリドーを新築し、図書館及び厚生会館を繋ぐことで、相乗的に機能強化を図り、キャンパスのイノベーション・コモンズ化(共創拠点化)に資する施設へと再生した。



期待される成果や評価

全国に先駆けて、大学の老朽施設において、社会の先導モデルとなる徹底した省エネルギー対策を図った改修整備を低コストで達成した。改修によるNearly ZEBの取組は、地域や他大学へ、積極的に横展開を図っていく予定。

本取組は、文部科学省の「カーボンニュートラル先導モデル」に選定される他、令和6年1月に国土交通省のインフラメンテナンス賞「特別賞」に表彰されるなど、先導的取組として評価されている。

東北大学施設部 - 東北大学 Green Goals Initiative:
<https://www.bureau.tohoku.ac.jp/sisetubu/ggi/ggi.html>

※ZEB(Net Zero Energy Building)とは省エネによって使うエネルギーをへらし、創エネによってエネルギーをつくることで、エネルギー消費量を正味(ネット)でゼロとすることを旨とした建物。「ZEB」、Nearly ZEB、ZEB readyなどに分類される。

03 東京大学

産学協創拠点、地域連携拠点の機能を併せ持つ 新時代の国際宿舎

2019年開寮の目白台インターナショナル・ビレッジは、国内の学知と人材の集積拠点である東京大学と、地域、産業が融合・協創し、集う人材がともに成長・発展しながら新たな価値を創造する複合協創拠点として整備された。東京大学に在籍する約1000人の学生・研究者が生活レベルで国際交流を行い、価値観豊かな人材としての素養を育む。



目白台インターナショナル・ビレッジのビジョン

住居エリアは、約20人1ブロックを単位として、リビングや水回りを共用とするシェア型居室704室と、水回りを居室内に備えた独立型居室153室から構成される。

地域社会に開かれたスペースとなっている敷地の入り口側には、コロナ禍に導入した日替わりのキッチンカー、コンビニやカフェレストランも設置されており、特にランチタイムには近隣住民や近隣企業の利用者も多い。また、大塚警察署協力のもと開催した防災セミナーでは、起震車やスモークハウスなどが地震の少ない国からの留学生や近隣の子ども達に好評であった。

産学連携エリア「アントレプレナービレッジ」では、本学研究室と民間企業が最先端の共同研究を行う。

新型コロナウイルス感染症の状況が落ち着いてきた現在、各種イベントの開催頻度を上げ、居住者間は勿論、地域住民の皆様や、併設の産学協創拠点とも積極的に交流を図っていききたい。



学生・研究者の交流の様子(住居エリア)



本学研究室と民間企業の共同研究の様子(産学連携エリア)

東京大学目白台インターナショナル・ビレッジ:
<https://www.u-tokyo.ac.jp/adm/housing-office/ja/housing/shukusha/mejirodai.html>

04 名古屋工業大学

アートフルキャンパス 一心の豊かさ、創造性を育む工学とアートによる共創

2022年4月、名古屋工業大学のキャンパスにアートの風を吹き込む「アートフルキャンパス事業」が始動。日常的に芸術に触れることで心の豊かさを育み、「心で工学」を追究することを目的とする。

キャンパス各所には包括的連携協定を結ぶ愛知県立芸術大学の講師や学生など、多様な作家がプロデュースした作品を設置。協同制作には本学学生も参画し、工学系の学生と芸術系の学生とのコラボレーションで作品のブラッシュアップ効果を生み出している。一例として、ソーラーカー部の技術協力により、発電・給電システムを備えたベンチと街灯を制作。通用門のオブジェ脇に設置し、地域住民との接点としての活用を期待を寄せる。



通用門付近に設置のベンチと街灯「uni verse」
本学ソーラーカー部が技術協力

壁画・絵画や彫刻などの導入を皮切りに、音楽なども含めた芸術空間の充実とリベラルアーツ教育の幅を拡大していく。

その一環として、紙漉きや音楽講座といった特別授業や大学院科目に「サウンド文化研究」を取り入れるなどの教育プログラムを展開。高度な工学の基盤であるキャンパスに、触媒としてアートを織り交ぜることにより、工学・芸術・技術・文化・伝統・歴史、そして人との間で様々な化学反応をもたらし、未来社会構築のための共創的な技術創出のためのプラットフォームへと進化させていく。

今後も更なる教育プログラムの充実を図る他、芸術家による公開制作やワークショップ、アーティストトークイベントなどの実施を計画中である。



23号館壁画
「砂漠のガーデン」
本学美術部の学生らも制作に協力

アートフルキャンパス WEB サイト:
<https://artfulcampus.com/>
X (旧 Twitter) :
https://twitter.com/nitech_artful

05 滋賀大学

ダイバーシティ教育の推進と 障害児者のための音楽教育支援センター「おとさぼ」の創設

ユニークで先進的な取組—音楽を生きる力に—

滋賀大学は、障害とともに生きる方々が生涯にわたって音楽に親しむ機会を提供するために、令和2年10月に障害児者を主な対象とした教育学部附属音楽教育支援センター(愛称:おとさぼ)を篤志により開設した。全国でも珍しい、障害児者を主な対象とした音楽教育センターである。

令和5年度は、文化庁委託事業「令和5年度障害者等による文化芸術活動推進事業」として、滋賀県内の特別支援学級など16校を巡る大規模な学校訪問コンサートを開催し、実施校から高い評価を得ている。

さらに、個別のニーズへの細やかな対応を目指した特別



社会連携イメージ図

支援ピアノレッスンや音楽療法、音楽教育の指導者向け研修会、センター内にあるギャラリーでのアール・ブリュット展の開催など、多岐にわたる活動を実施。

「おとさぼ」は、大学の人的・知的資源を活かした社会貢献の場として、学生の実習やボランティアの場として、滋賀大学が重点を置くダイバーシティ教育の社会に開かれたコモンズとなっている。

成果・評価

ユニークな活動が評価され、障害者の生涯学習支援活動に係る文部科学大臣表彰、日本音楽療法学会日野原賞、日本アートマネジメント学会賞を受賞。



障害に関係なく楽しめるコンサート

文化庁の委託や財団法人からの助成を得て、積極的に事業を展開。今年度は3,000人以上の人々に音楽を届けている。

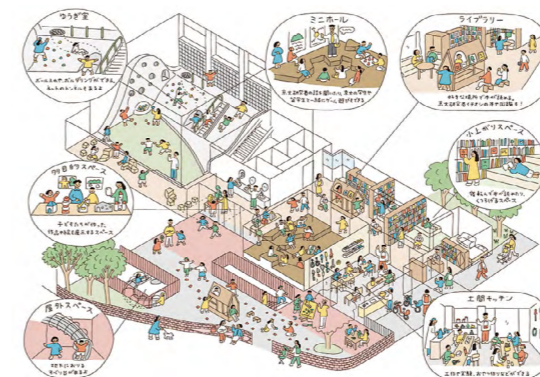
おとさぼ HP:
<https://www.otosapo.com>



06 京都大学

国立大学が創る新たな学童保育所モデル 『京都大学キッズコミュニティ (KuSuKu)』

京都大学は、ダイバーシティ・エクイティ&インクルージョン及び教職員・学生のウェルビーイングの一環として、令和5年12月に学童保育所 京都大学キッズコミュニティ (KuSuKu:読み「クスク」) を開設した。学内アンケートで利用ニーズが高かった土日祝日や夏休み・冬休み等小学校の長期休業期間に開所し、子育て世代を支援するとともに、子どもたちに遊びと学びを触発する環境を提供する。



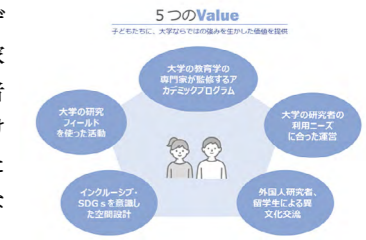
京都大学男女共同参画推進センター KuSuKu WEB サイト:
<https://www.cwr.kyoto-u.ac.jp/support/care/community/>

特徴の一つ目として、大学の強みを活かした、アカデミックな環境である。

京都大学出身の建築家や企業関係者が参画し、今までにない新しい発想でデザインされた施設・家具や京都大学研究者が書いた子ども向けの本などをそろえたライブラirie空間などを用意している。

特徴の二つ目として、京都大学の研究者・元教員等が講師として参加するアカデミックプログラムを実施する。

京都大学の教育学の専門家等で構成される運営委員会が監修するプログラムで、小学生が大学の多様な研究者や研究のフィールドに触れ、研究や科学の面白さ、調べてわかることの楽しさに気づく多彩な機会を提供する。



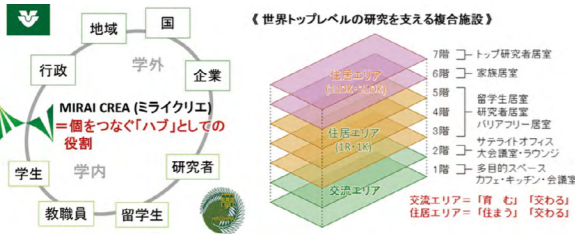
07 広島大学

世界・地域・大学から人が集い、交流する、ワクワクする「場」を創り出す

特徴ある取組

グローバルな頭脳循環と交流ネットワークの形成によりイノベーションを創出する国際的活動拠点の要となる施設として、2021年10月に「広島大学フェニックス国際センター MIRAI CREA (ミライクリエ)」を開設。

この施設は、大学自己資金 10 億円に加えて、「Town & Gown 構想」を一体となって取り組む東広島市に学長が依頼し、5億円の支援を受けて完成した。



取組の様子

■「Town & Gown 構想」によるイノベーションの創出

東広島市と広島大学が地方創生に取り組む「Town & Gown 構想」を推進する活動拠点が設置された。

産学官が一体となったスマートシティ共創コンソーシアムを中心に、学内外の組織を越えた交流が生まれ、まちづくり、DX、GX などの分野で実証実験や人材育成などが進められている。



■世界と地域を結ぶイノベーション・ハブ形成

東広島市と協力して定期的に国際交流イベントを開催するなど、世界中から集まる優秀な学生、研究者と、本学の構成員や地域住民を直接結びつける国際交流拠点となっている。



参考 URL : <https://miraicrea.hiroshima-u.ac.jp/>

08 九州大学

歴史や自然などの豊かな環境と共生し、未来社会を切り拓く実証実験キャンパス

新キャンパスへの統合移転

2018 年に統合移転が完了した伊都キャンパス(福岡市西区と糸島市にまたがる東西約3km、南北約2.5km、272haの広大な敷地)を新たな社会モデルの実証フィールドとして位置付け、スマートモビリティや通信、エネルギー等に関する実証実験を行い、Society5.0 やスマートシティを見据えた社会実装の実現に挑戦している。

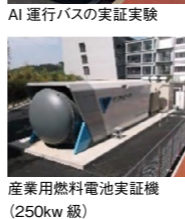
周辺に里山や農地が広がり、建物面積50万m²を超える建物群により形成される一種の擬似都市は、キャンパス・マスタープランを基に整備を行っている。



実証実験の場としてのキャンパス

■AI運行バス

キャンパス内に乗車ポイントを設置し、スマートフォンからリアルタイムで発生する乗車リクエストに対し、AI (人工知能) が効率的で最適な配車・経路を自動計算処理により設定する実証実験を、最大規模かつ最長期間で実施している。



■産業用燃料電池実証機 (250kw級)

25,000時間を超える屋外運転に成功し、地震や台風等の作動環境下で得られた知見が、更なる技術革新へ応用されている。

■水素エネルギー研究

製造や貯蔵、利用、安全管理等の全体サイクルを俯瞰する人材育成、産学・国際連携、社会実装が可能な国際的研究教育拠点として機能している。



岩手大学

地域に開かれたキャンパス
農学部植物園における「うえだ交流まつり」

お茶の水女子大学

「国際交流留学生プラザ (Hisao&Hiroko TAKI PLAZA)」
～国際交流・地域貢献・世代間交流～

筑波大学

“キャンパス”の価値を最大化させる
～DESIGN THE FUTURE, TOGETHER.～

筑波技術大学

障害科学と東西保健科学の融合!
国内外の連携と東洋医学と西洋医学における統合医療

信州大学

「知」と「人」を繋ぐ場としての大学図書館
～開かれた「知の拠点」を目指して

金沢大学

未来知による社会貢献や新たな産学連携を促進する
共創研究センターの設立

浜松医科大学

～優れた医療人の育成拠点～新たに生まれ変わる講義実習棟

東海国立大学機構名古屋大学

キャンパスを広く学内外で共有される「コモンズ(共創の場)」へ転換

滋賀医科大学

憩い・集い・つながる場所
これからもよき医療人を育み続けるための環境整備

大阪大学

地域活性化のハブとなる大阪大学箕面キャンパスの取組

愛媛大学

ひめテラス(E.U.Regional Commons)の設置
～地域ステークホルダーとの「共創・協働」の推進～

高知大学

日本全国、世界各国に広まるよきこい祭りを
大学キャンパスで! 「高知大学演舞場」

九州工業大学

九工大の未来思考キャンパス構想

佐賀大学

「産学交流プラザ」産学連携の促進に向け、学術研究成果の
地域への還元、またその情報発信のための複合施設

熊本大学

熊本大学キャンパスミュージアム
一人々の歴史、文化、伝統の理解や学びに貢献

宮崎大学

キャンパスコアに位置する24時間フルオープンの施設で
学生・社会人が未来を熱く語る

文部科学省からのお知らせ

～キャンパス全体を「イノベーション・コモンズ(共創拠点)」へ～

文部科学省では、大学等キャンパスを多様なステークホルダーとの共創活動を実現する「イノベーション・コモンズ(共創拠点)」へと転換していく取組を推進しており、全国知事会や産業界も参画した有識者会議において、イノベーション・コモンズの実現や更なる展開に向けて、整備の考え方や取組のポイント、関連事例等を取りまとめています。

「イノベーション・コモンズ(共創拠点)」の実現に向けて(令和4年10月)

我が国の未来の成長を見据えた「イノベーション・コモンズ(共創拠点)」の更なる展開に向けて(令和5年10月)

